

胡蝶の夢二

司馬遼太郎

司馬遼太郎全集 第四十一卷

第二期第九回配本 胡蝶の夢 二

定価 一八〇〇円

昭和五十八年十二月十五日発行

著者 司馬遼太郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

〒100 東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（代表）〇三―二六五―二二二一

印刷所 大日本印刷

製本所 大口製本

製函所 トーシキ

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

胡蝶の夢二

司馬遼太郎全集41

司馬遼太郎全集第四十一卷

胡蝶の夢 二

有隣は悪形にて

大楽源太郎の生死

解説 日本人の人間関係を
形成する伝統の基底 谷沢永一

457

429

401

5

装幀 三井永一
題字 中田 功
A D 粟屋 充

胡蝶の夢
二

目次

江戸へ	9
殿中	19
変転	36
関寛斎	56
良順	78
浮雲	115
江戸晩景	136
大坂	171
西の風	194
江戸の正月	230

西軍来る	251
佐渡から	269
阿波から	287
江戸の良順	297
脱走	308
横浜	320
惨風	342
西風東雨	364
東京	372
陸別	382
伊之助の町で——あながきのかわりに——	392

江戸へ

この年（文久二年）の秋が深まる頃、良順は日見峠を越えて長崎を去った。

陸路、江戸へ帰る。

妻子は、幸い横浜へゆく英国船があったので、それに便乗させてもらった。良順もその船に同乗したかったのだが、自分も江戸に連れて行ってほしいという者が多すぎた。

ついには二十三人になった。これだけの人数を船に乗せるわけにゆかず、このため良順も江戸まで四百里の陸路を歩くことにした。

「五日はつらいぞ」

良順が一同をおどしたのは、全員が数年間、すわりっぱなしで物を覚えたり理解したりすることに熱中してしまっただけで、脚の筋肉がゆるんでいるはずだった。初日、日見峠で音をあげる者もいた。

幕臣が公務で旅をする場合、身分によってそれなりの供の数をそろえ駕籠を用い、道中では本陣でとまることになっていたが、良順の性格は骨の髄まで書生で、そういうお

となの真似がやりきれない。かれは二十三人のなかにまじって、庶人と交わらない旅をした。

良順たちは流行の葦山笠をかぶっている。七年前に死んだ開明家で代々の伊豆葦山代官だった江川太郎左衛門（英竜・坦庵）が洋式訓練用に発明したものといわれる。編笠だが、材料はコヨリである点で風変わりである。それへ黒漆を塗って防水性をもたせ、内側は紺の紙張りで、ぜんたいの形が、かしわ餅に似ている。この国防用笠が武士の旅装として大流行したのは、外圧のなかで国内のあらゆる課題が熱を帯び、崩壊、発火、ひずみ、欠落、膨脹など、さまざまな物理作用をおこしているこの時勢の格好な象徴といっている。本来、旗本の士の正規の旅装用の笠は、黒漆に金で定紋を入れた陣笠であったが、良順がそれを用いず、二十三人とおなじ笠を用いているというのも、過去の何かの崩壊、もしくは良順一個の意識の象徴として見られなくもない。

この場合、二十三人が良順に従っていつせいに江戸へゆくというのも、異常といえそうである。

かれらはすでにボンベから卒業証書もらった者ばかりだが、長崎に残るという選択もできた。あらたな教師ボードウィンからたとえばその卓越した眼科学を学ぶことに魅力があるはずだったが、戸塚文海の並みはずれた功利的性格をきらった理由がもっとも大きい。

それに次ぐ理由としては、江戸で誕生した西洋医学所に

ついでであつた。良順がボンベに、

「あなたから教わつたすべてを江戸に移し植えます」

と言つたことは、長崎のボンベを江戸の西洋医学所に持ちこむことであり、それには補助者が必要だつた。良順はかれらの何人かをそれにあてようと思つてゐる。しかし二十三人のすべてには必要がない。

蘭学の歴史は長崎で興り、大坂で栄え、このつぎは圧倒的に江戸で開花することが目に見えてゐる。人材も緒方洪庵もそうであるように江戸に集まつており、その中心が西洋医学所になるはずであつた。かれらは自藩に帰る前にその新状況を見ておきたかつたのである。

ここで、余談を点綴しておきたい。

長崎における良順時代の医学伝習は、幕府の法慣習のたてまえから、幕府の招聘教師であるボンベに幕臣である良順ひとりが学ぶというもので、他の諸藩の士は良順の私人としての弟子ということになつてゐた。

ボンベの後任のボードウィンがこの不合理さを長崎奉行に訴へた。これによつて、この年の十二月、あらたな布告が出た。

役医師（諸藩の医師）はむろんかまわぬ、地下の者でも苦しくない、というものであつた。地下の者とは、農民や町人をさす。この時代、一家の中にも階級があつた。それをわざわざ明記して、当主だけでなく「悴、次、三男、厄

介者」にいたるまでかまわぬ、という。厄介者とは一種の法律用語で、諸藩の士であれ農家であれ、当主の弟などで分家もしくは養子ゆきまたは独立などをせず、成人後も当主の厄介になつてその家に同居してゐる者をいう。

この点、すでに徳川封建制の崩壊がはじまつてゐたといつていい。洋式設備をこの封建社会に誘致するというのは、誘致者の望まない思想の種子までがそこに付着してくるようである。

この布告は、他の面でも、重要ななにごとかを暗喩してゐる。

本来、「徳川」は幕府を持ちつつも近代国家の概念での国家もしくは政府ではなく、あくまでも家であつたということである。徳川家がその数百万石の所領からの租税で幕府を運営し、たとえば長崎医学伝習所も経営してゐる。良順の時代までは徳川の経費できたボンベには徳川の臣が学ぶという原則であつたが、良順以後、地下人にまで門戸がひらかれたのは、いつのまにか徳川家が家でなく国家になつたことを示してゐる。

安政条約による外国との交渉の影響のあらわれといつていい。徳川家としては日本国の居住者はすべて徳川將軍の国民であるという顔をしなければ、諸外国は日本を公国の連合体と見、雄藩と直接交渉するおそれがでてきたのである。封建制が、この一点でもこわれはじめてゐる。

江戸へむかう良順ほか二十三人の医生のなかに、良順の義兄の佐藤舜海と、良順がひそかにその哲学的に漂白された人柄に畏れをさへいだった閑寛齋のふたりは入っていない。

かれらには、ほしいままに長崎に留学できるゆとりがなかった。佐藤舜海は、佐倉の順天堂の師なのである。書生たちを待たせたまま長崎にきていた上に、藩医佐藤家の当主であった（良順の実父佐藤泰然は安政六年に隠居し、佐倉藩の藩医である家と職を舜海にゆずっている）。この時代、当主が家と職を空けることはどの藩でも原則としてはゆるされず、そこを舜海は押して長崎留学した。長崎に三年いた。これが限度であった。

閑寛齋の場合、百姓身分であるためそういう拘束はない。拘束するものは、金であった。

もともとこの留学は銚子の義商浜口梧陵（りやうりやう）のすめによるもので、金も出してくれた。百両という大金で、寛齋はこれほどの金をうまれてはじめて見た。ただかれには故郷に養父母と妻子があり、不在中、かれらが餓えねばならない。そこで半分の五十両を家に置いて出た。

他の半分で往復の旅費と数年の滞在費をまかなうとすれば、いかに大金でも不足であった。寛齋が長崎往復と長崎滞在中、着たきり雀だったのはこのことによる。着物はすりきれてしまった。その上に継ぎあてを重ねて行ったため長崎の橋の下の乞食もおどろくほどになった。

良順は長崎時代、この寛齋を何度か丸山へ連れて行ったが、この姿で機嫌よく平然と酒を飲む寛齋の姿に、丸山の遊女たちも一種荘厳な感じさえもったといわれる。

その寛齋は、舜海とともに長崎を去った。寛齋の文久二年の日記の正月のくだりに、

二十四日 雲

行装ス。

と簡潔に書かれている。

佐藤舜海が佐倉に帰ると、たちまち順天堂の講義が充実した。

舜海の帰国後、洋学熱心な越前福井藩から藩命によって五人の蘭方医が佐倉にやってきて、舜海がとったボンベの講義ノートを写させてほしい、と乞うた。舜海はよろこんでそれらを開放した。もともとボンベ自身、本国で学んだ教科書とノートをそのまま日本に持ちこんで教授したことはすでに述べたが、これらが佐倉に根付き、さらにノート謄写のかたちで越前福井へゆくのである。

寛齋は、銚子に帰ると、長崎帰りということで、流行医になった。およそむさぼることのない男だったが、それでも一年ほどで浜口梧陵に借金の半分以上を返済することができたというから、その流行ぶりが想像できる。ただし、梧陵は返済は半分だけでいい、といったために、以後寛齋はほ

とんど施療同然の医家になった。

すでに日本は安政条約によって国際社会のなかにある。しかし国内は幕藩体制が不動で、ひとびとは国内に身を置かれてしまつたことを実感できない。わずかに長崎や横浜で異人の姿を見ることが、それに対して攘夷志士が慷慨し激昂していることぐらいが、前時代ときわだつて変化した点であつた。

大小の藩が、あらそつて藩に洋学的要素を入れようとしている。概して西国の藩が過敏で、関東、東北の藩がおおむね鈍感であつた。

四国も鈍感ではなかつた。小藩ながら開明的な藩主をもつ伊予宇和島藩がその好例だが、ただ阿波徳島藩だけは例外だつた。阿波一国と淡路をもつこの蜂須賀家二十五万七千石の大藩は、活動性をこのむ阿波人氣質とはべつな体質をもっているようで、洋学の面でも無関心に近かつた。

弘化三年（一八四六年）四十七歳で死んだ高良斎のような卓越した蘭方医をこの藩が逸したことは蜂須賀家の体質と無関係でないであろう。良斎は徳島城下に生まれ、漢方の眼科医の養子になり、文政年間、十九歳のとき一転して蘭方を志したのは、進取性にとほしい徳島城下という環境を考えるときわだつた発想といえる。長崎にゆき、やがてシーボルトに出会つた。

シーボルトに就くこと、八年であつた。シーボルトが良斎の秀才と人柄を愛することはなほだしく、ついには父子のようであつた。シーボルトが帰国するとき有名なシーボルト事件がおこり、良斎も他の多くの弟子とともに投獄された。

出獄後、徳島城下で町医になつた。

かれは本草学にすぐれ、また臨床医としてはシーボルト仕込みの眼科が得意であつただけでなく、シーボルトが帰国にあたり、かれにこの当時日本にはなかつた眼科の医療器具や貴重薬二百斤を贈つたが、この医療器具がかれの臨床に大いに役立つた。その名声は大坂まできこえ、患者が海をわたつて徳島にきた。明石侯の眼疾を癒したことで明石藩から招聘があつたがことわつた。かれを藩医として招こうとした藩は薩摩藩ほかかぞえないほどだったが、阿波徳島藩だけは黙殺した。かれはのち徳島をすて、大坂で開業した。生涯、官に仕えず、その上、富豪をきらい、どのように往診を乞われても行かなかつた。

その徳島藩が、文久二年、銚子で開業中の関寛斎を藩医として招聘すべく執拗に交渉しはじめた。高良斎の死後十六年経つうちにこの藩もなにごとに気づいたらしい。

徳島藩は江戸日本橋で開業していた蘭方医須田泰嶺を江戸藩邸詰の藩医にしたが、本国にはひとりの蘭方医もいなかった。須田は寛斎とは順天堂の同門だけに、その人物をよく知っており、かれが推挙し、みずから交渉にあたつた。

寛齋は仕官を好まなかったが、この兄弟子の懇願を黙殺できず、ついに承知した。良順が長崎を去ったころのことである。

良順が長崎から江戸へむかっている途中、かれの有縁のひとびとの運命が、関寛齋だけでなく、さまざまに変化している。

時の勢いとはこういうものだ、と良順はおもわざるをえない。いまから十年ほど前に世を終えたひとなら想像もつかない激流が時勢をたぎらせ、押し流している。

(おれの運命もどうなるかわかったものではない)

良順は漠然と前途についてそう思っている。

もっとも大きく変わったのは、佐倉にいた実父の佐藤泰然であつたらう。

元来、この人物は私心がどこにあるのか、見当がつかない。自分の学問や術技については若いころから執念ぶかく研鑽したが、それをもって栄華や富貴を得たいという欲望はつとめて閉ざし、すこしばかりの栄華を得るとすぐ捨てるというところがあつた。

名前にさえ固執しなかつた。

かれが父の藤助のあとを継いで旗本伊奈家の用人をつとめた若いころは、田辺庄右衛門である。

その職を友人の山内徳右衛門(豊城)にゆずって蘭方修業を志し、長崎に留学した三十一歳のときから和田泰然を称

した。江戸薬研堀で開業して繁昌した時代も、和田泰然である。良順が生まれたこの薬研堀の医院を泰然はかれが可愛がつていた後輩の林洞海にくれてしまい、佐倉に移り、藩医になったときから佐藤泰然とあらためてゐる。

かれが自分の家系に一片の神聖意識も持っていないかったことは、この時代の人物として驚嘆に値する。かれは実子をどんどんひとに呉れてやり、佐藤家姓を名乗らせず、先祖を祭祀するという儒教的義務から解放してしまつた。良順の実兄惣三郎は友人の山村氏へやり、良順はおなじく友人の松本氏にやり、良順の末弟の董は林氏にやつた。林董は後年、駐英公使として日英同盟をむすぶ。

かれが、佐倉藩の藩医と順天堂とを弟子の旧姓山口舜海にゆずり、自分は隠居したのが、良順が長崎の西坂の台上でポンペの指導のもとにはじめて解剖実習をした安政六年(二八五九年)のことで、泰然の五十五歳のときであつた。

のち佐藤舜海がポンペに就学するため長崎に滞留した期間中、泰然は留守をまもつてふたたび禄仕したが、しかし舜海が佐倉に帰ると、いっさいを舜海にゆずつただけでなく、佐倉城下を去り、新興都市の横浜に移住してしまつた。これから見ると、佐藤泰然の生涯は、一種の漂泊ともいえるであらう。

泰然が、旗本の用人から中年で蘭方医になったように、つねに現在の境涯にあきたらず、新奇を好む性格があつた。最後の地を横浜にもとめたのも、そういう性格と無縁では

ない。

すべての公職から退いて無縁になった佐藤泰然が、あらたな居住地を横浜にもとめた理由の大部分は、横浜にきている米国の医師で伝道家のヘボンについて医学を学ぶためであった。ときに文久二年、泰然は五十八歳である。

ヘボン式ローマ字で記憶されるこの人は、ペンシルヴァニア州のミルトンに住む法律家の次男に生まれ、熱心なキリスト者であった母に薫陶され、その影響をつよくうけた。かれは本来J・C・ヘッバーンであったが、日本人がヘボン先生とよぶために、みずからも「平文」と署名したりして、在日三十三年のあいだ、そのよび方に甘んじた。

ヘボンの少年時代、米国の教育制度はその後のように整備されておらず、一八三一年、十六歳でプリンストン大学の三年に編入し、在学一年半で卒業した。当時、プリンストン大学はまだカレッジの時代で、校舎も五、六棟という小さなものだったという。

そのあと、ペンシルヴァニア大学医科に入って四年間在学し、卒業と同時に医学博士の称号をうけた。二十一歳である。

卒業後、数年、勤務医になったり開業医になったりしたが、やがて伝道医を志し、中国に出かけ、五年後に帰国し、ニューヨークで開業した。

ときにコレラが流行し、かれはこの悪疫については中国

で医療経験があったためにこの治療で評判になり、その小さな医院がたちまちニューヨークきっての大病院になった。眼科でも評判をとり、三つの大きな邸宅と別荘のちねしになった。

やがて日本の開国をきき、安政条約によって神奈川などが開港されたことを知ると、十三年間の開業生活をやめ、いっさいの財産を処分し、北米長老ミッション本部に所属し、その妻クララとともに神奈川にきた。日本の安政六年で、良順の長崎時代の三年目であり、その実父佐藤泰然が隠居した年である。

四十四歳の小柄なヘボンが、その妻とともに住んだのは、成仏寺というわらぶき屋根の魔寺だった。この寺をあっせんしたのは神奈川奉行である。ヘボンの目的は伝道にあったが、日本ではなおキリスト教は国禁だったので、とりあえず米国公使館付の医官になり、一方、成仏寺で日本人に英語を教授した。

当時、攘夷熱が沸騰している。げんにヘボンの成仏寺から遠くもない生麦村で、薩摩藩の行列が、英国人を斬った。薩摩藩はあらかじめ遠出する外国人は日本の慣習にしたがうべきことを幕府機関を通じ各国公館に通告していたが、それを無視してピクニックのために騎行して出かけた四人の英国人が行列の先頭を横切った事件がおこった。良順が長崎を去る前の八月二十一日のことで、ヘボンはかけつけて怪我人の手当をした。

こういう時代でも、ヘボンを尊敬する日本人がすこしずつふえていた。のちに外人殺傷をやった攘夷志士間宮一という者がヘボンから眼病の治療をうけたことがある。

「異人は虎狼と同じけれど、独り米人ヘボン先生、至って慈悲深く医療に長じ、眼病は一点の薬水にて平癒せざるはなし」

と、間宮は書いている。

佐倉から単身横浜にやってきた佐藤泰然は、隠居したときに伸びっぱなしに伸ばしたひげが顔半分をおおい、それも白いものがまじって、袂くそのようにきたなくなっていた。

「横浜では、六三郎の家に寄留する」

と佐倉の者には言い置いて出た。

六三郎とは、甥のひとりである。

佐藤泰然が、若いころの家職だった旗本の用人を、当時浪人だった友人の山内豊城（徳右衛門）にゆづったことはすでにのべた。この山内豊城は泰然の妻たきの姉せいを妻にしているから義兄弟でもあった。自然、豊城の三男六三郎とは、血はつながらないながら叔父・甥の仲になる。

泰然は六三郎を早くから佐倉の順天堂にひきとって蘭語と蘭方を学ばせた。

当時、幕府は学問、技術、外交の面で欧州語を必要とし、蘭語の出来る者なら諸藩の士であってもかまわずに引きぬ

いたが、幸い山内六三郎は旗本の家来とはいえ幕府につながっている。これを微役ながら幕臣にし、文久元年六月、横浜運上所（税関）に配属し、翻訳方の役につかせた。身分は直参の下級の御家人であり、明治後の官制でいえば判任官というところであった。

山内六三郎は晩年、提雲と号したことは、かつて触れた。その自叙伝によると、七人扶持、手当金二十両、筆墨料一カ月一両、日当手当金一歩で、二十三歳の独身者としてはわるい俸給ではない。

役宅もついていた。が、直参とはいえ御家人身分の者は家は小さく、かれの場合も、八畳二間しかない。ただし、二畳の玄関と次の間が二、三畳ついていた。

この税関（運上所）では、口頭の通訳は長崎の唐通事（中国語）とオランダ通詞を多数横浜に移し、そのことに当らせている。

山内六三郎ひとりが、文書のみを日本文に直す翻訳方であった。

日本は、ヨーロッパ語はオランダ語しか知らない。このため各国の公館から神奈川奉行に出す公文書はかならず蘭文であった。しかし次第に各国ともそれを怠り、自国語で出すようになった。とくに英国公使館の場合、最初から英文のみを使っていた、と提雲の自叙伝にはある。

六三郎は、むしろ英語を知らない。このため英蘭対訳の辞書を買入れ、英文の書簡の単語の上に一語ずつ蘭語の